OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	週刊誌『アサヒ芸能』と性風俗の構成
Author(s)	景山, 佳代子
Citation	年報人間科学. 2000, 21, p. 191-205
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5467
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

週刊誌『アサヒ芸能』と性風俗の構成

景山佳代子

〈要旨〉

本研究は戦後日本における「性風俗」の変遷に、その重要な構成要件としてのメディアという視角から接近する試みである。こうしたメディアのなかでも、本稿でとくに注目するのが男性週刊誌『アサヒ芸能』である。

『アサヒ芸能』はその草創期の頃より、下半身の世界から社会を捉えていくという編集方針にたった雑誌作りを行い、二流であることを積極的に引き受けていった稀有な雑誌である。その取り組みは、四十年以上にもわたって『アサヒ芸能』の読者層に受け入れられている。では実際「二流」であるとはどういうことなのか。それを、『アサヒ芸能』の編集方針に大きな影響を及ぼした売春防止法制定前後の記事を中心に見ていった。

本稿では、「性風俗」をセンセーショナルなものとして取り上げられ、認識される性のあり方とした。それは必然的に移ろいやすいものではあるが、同時にその基盤はあくまでも日常生活に根差したものである。そしてこの「性風俗」が売防法のインパクトによって変容を遂げる。つまり売防法はかつてあった性の境界を崩壊させ、性的な空間が架空の境界によって成立するようになる。そのとき、「性風俗」の構成要件であるメディアの役割が増大することになるのである。

しかしこうした議論からは本研究の限界もまた明らかにされる。つまり『アサヒ芸能』が「性風俗」をいかに構成していくのかについては、今回議論の中心に据えた『アサヒ芸能』の記事をみていくだけでは不十分であり、そのプロセスを把握するには、記事以外の要素が必要不可欠なものとなる。つまり『アサヒ芸能』というメディアに演出されていく「現実」とそれを演出していくものたちの「現実」という要素である。これらの要素について検討していくことが今後の研究の課題である。

キーワード

・『アサヒ芸能』　・性風俗　・売春防止法　・吉原／千束

はじめに

現代の性。その複雑さと多様さのために、それがいま私たちの社会にどのような意味をもつものなのかを理解することは非常に困難な現象である。この現代社会に生きる我々にとって「性」とはどのようなものなのか、そしてそれはどのようにして形成されてきたのか。

「第二次大戦の敗戦からの十年間は、日本における性―生殖統制が現代的に再編成される時期である」（藤目、一九九八、四一七）。藤目は戦後の売春防止法と優生保護法の制定過程を緻密におい、敗戦からの十年間を性が現代的に再編された時期だと結論づけた。本稿においては、藤目のこの議論に依拠し、再編成の一応の終結をみた後の一九五〇年代後半以降を研究の出発点とする。

さらにこの時期の性を捉えていく一つの視点として今回、とくに注目するのが「性風俗」である。風俗の研究は、「社会の規制の陰に押し隠されたものを、あえて明るみにひきだす」（小関、一九八七、一六五）。なかでも『生』における『性』の重要性を考えれば、セックスの問題は避けては通れない」ほど大きなウエイトを占めるはずのものである。だが「飲食やファッションの風俗を語ることにくらべて、『性』の風俗を語ることは、はるかにむずかしい」（同書、一六四）。「性風俗」を語ることの困難性はそれの捉え難さに大きく左右されている。そしてその困難さゆえに性風俗の社会学的な研究はいまだ十分な展開をみていないのである。とすればまず「性風俗」をいかにして捉えるかが重要な問題になってくる。本稿においてはその捉えがたい現象である「性風俗」をすくい上げていく一つの方法として、男性週刊誌『アサヒ芸能』をとりあげる。

一　週刊誌『アサヒ芸能』[注二]と売春防止法

週刊誌『アサヒ芸能』はタブロイド判の芸能新聞『アサヒ芸能新聞』[注二]をその前身とする。当時の発行元は徳間康快氏を社長とする東西芸能出版。売上げ二～三万部の弱小出版社であった。そんな『アサヒ芸能新聞』の転機となるのが、一九五六年二月の『週刊新潮』の創刊である。それまで週刊誌といえば新聞社系週刊誌の専売であり、広汎で機動力のある取材網をもつ新聞社に伍して、書籍・雑誌を扱う出版社が週刊誌を出すことなど想像もできない時代であった。実は売上げ低迷のため廃刊の危機に瀕していた東西芸能出版でも、五五年の時点でタブロイド判からB5判への移行が検討されていた。タブロイド判はたしかに写真が大きく迫力もあるが、持ち運びが不便で読者が通勤の電車で読むわけにはいかない。新聞社スタイルのB5判週刊誌なら手軽で、駅売店におけば売上げが伸びるのではないかという期待があった。しかし、このときは時期尚早ということで移行は見送られた。それほど出版社の週刊誌への参入は困難なものと認識されていたのである。

しかし『週刊新潮』はそうした世間一般の常識を裏切るかのよう

に出版社系週刊誌の第一号として創刊された。二報性に徹して事件や話題を追い、新聞記者が書く記事風スタイルの文章とはちがった文学的文章による表現で、それまでにない新しいスタイルの娯楽週刊誌として『週刊新潮』はうけた。東西芸能出版もこの年の一月第三週号をB5判で発行し、念のために四月にも別冊としてB5判五万部を刷って読者の反応をみたが、感触はよかった。先発の『週刊新潮』の売れ行きも好調で、マスコミでも話題になっている。『アサヒ芸能新聞』のB5判への移行が決定した。だが新聞社によって固められていた市場への新規参入は、『アサヒ芸能』の生き残りを賭けたものであり、失敗は許されなかった。その基盤を確立していない『週刊新潮』と『アサヒ芸能』は互いにつぶし合うという愚を避けようとし、またそうすることが可能なほどの未開拓なフィールドが用意されていた。後発の『アサヒ芸能』としては『週刊新潮』と話題を奪い合うことにならないような雑誌づくりを目指していたと考えても無理はないだろう。ここで『週刊新潮』との棲み分けを狙った雑誌づくりが行われていく。

一九五六年九月末、B5判週刊誌『アサヒ芸能』が街へ出る。表紙の地は黄とブルー、真ん中に女優杉田弘子が籐椅子に座って左手にパイプを持ったポーズのカラー写真、上部には赤で刷り込まれた『アサヒ芸能』という題字が目立つ。その下には緑で「映画・ステージ・娯楽・スポーツ・流行」という文字が入っていた。定価は三〇円。B5判週刊誌に切り替えたとはいえ、まだまだ芸能誌臭の濃い雑誌であった。だが創刊から五、六号もたつとグラビアは芸能界を離れ巷へと出始める。本文もそのあとを追うように様相を変え始める。十二月三〇日号では「クリスマス・イブの恐怖―SEXで汚される聖夜―」という記事が掲載され、この企画が大成功を収める。それまでどんなにがんばっても二～三万部で低迷していたものが、ついに七万部という発行部数を打ち出したのである（表1参照）。翌五七年三月にはいると、表紙の題字下に入れていた「映画・ステージ・娯楽・スポーツ・流行」という文字をとった。ちなみに当時の特集を何本かとりあげてみると、三月十日号「サラリーガールの生態―金と恋と夢―」、三月二四日号「男三千人との記憶―ある赤線女性別離の手記―」、四月二一日号「型破りセックスアピール時代」など。毎月一万部ずつ増刷され、発行部数はうなぎのぼりに増えていった。編集者はその成功の理由を『アサヒ芸能』独特の世相をうがった特集にあるのではないかと考え、これ以後時代々々の風俗を敏

（表1）

発行日	発行部数
1956／10／07	54276
／11／11	60180
／12／30	75995
1957／03／24	100697
／06／23	153549
／10／27	201425
／12／01	222105
1958／01／12	250000
／03／23	261969
／05／11	302806
／06／29	310380
／08／24	323720
／10／26	347544
／11／23	368804
／12／14	380750
1959／01／11	445250

感にとらえ、なおかつその風俗を下半身からみていこうとする姿勢が定着していく。「庶民ジャーナリズムとして社会・風俗を中心につっこんでいい」くという編集方針が固まってきたのである。

さらにこうした『アサヒ芸能』の編集方針を決定づける出来事があった。五六年成立、五八年施行となった売春防止法である。実質上の公娼制度として戦後存在していた赤線が、賛否両論交えながらもここに廃止されることになったのである。庶民ジャーナリズムを志向する『アサヒ芸能』にとってこれは格好のテーマとなった。尽きることのない性の需要。それを充たすべく性の供給は必ず為される。ではどんな形でどこに出てくるのか。『アサヒ芸能』はその行方を徹底的におっていくようになる。五七年十一月一七日号「ドヤ街の売春婦一掃運動」、十一月二四日号「欲望街0番地―赤線はつぶれても」、十二月二九日号「都会のスリル地帯―二人組でかせぐ夜の女」などほとんど毎号のように売防法関連の記事が掲載された。徳間氏は当時をふり返って次のように述べている。「高尚な政治や経済や文化ももちろんよい。しかし、背伸びして、格好をつけて、今風にいえばブリッ子になることもないではないか。セックスそのものは悪ではないのである。売防法の実施で性の〈売買〉は潜行するだろう。そこに、もろもろのドキュメントがある。それを掘り返して広く大衆に訴えることは、これは立派な問題提起ではないか。それを〈二流〉というなら〈二流〉でいいではないか。〈二流〉に徹して耐えようではないか」。

五八年にはいるといよいよ間近にせまった売防法の全面施行に焦点を合わせた特集が多数組まれる。さらに週刊誌『アサヒ芸能』の売れ行きにあわせて、販売網の拡大を目指した全国の弘済会営業所巡りや、綜合出版社への第一歩としての単行本出版計画を打ち出すなど、その営業体制を確立していった。

「性」、なかでも売防法への取り組みは、『アサヒ芸能』が「セックス」をどう取り上げていくのかを決定づけ、さらには『アサヒ芸能』という雑誌自体の方向性を確立するものであった。ゆえに本稿では、『アサヒ芸能』の記事のなかでも売防法とそのターゲットとなった赤線、なかでも赤線の「総本山」[1]とされる吉原とその周辺を中心にみていくことにする。

二　盛り場と性風俗

南に浅草歓楽街、北には山谷ドヤ街を控える吉原は、売防法施行前までは「東京最大の赤線地帯」[2]であり、ここ一帯に「客を吸い込む強力な磁石の役割を果たしてきた」[3]。「吉原というとすぐ騒がれる（神崎）」「ほんのちょっとのことでも新聞や評論家が騒ぎ立てる（市川）」[4]とあるのも、赤線吉原が当時の人々にとって大きなインパクトをもつ言葉であったことを物語っている。都内十六ヶ所の赤線ばかりでなく全国赤線のリーダー格であり、公娼制度の象徴的存在であったとされる吉原（小林他、一九七一）。草創期の『アサヒ芸能』はここをどのように取り上げていたのだろうか。

「東京最大の赤線地帯だった吉原の純粋転業旅館は閑古鳥がないてい

る。（略）酔っぱらった数人ずれの男が『女のサービスをたのむぜ』と入ってくる。断ると『なにいってるんだ。吉原に女なしじゃ意味ねえぞ』と捨てぜりふを吐いてゆく。」[2]

売防法の施行によって消滅したはずの赤線吉原だが、客は相変わらず集まってくる。あぶれた男をつかまえようと、街娼たちが毎夜この一帯をうろつくようになる。『アサヒ芸能』はそれをとらえて「吉原は相変わらずの『不夜城』だ」と伝えるのだが、これらは吉原という名前が喚起するイメージとそれほど隔たったものではない。だが売防法施行以前の赤線吉原を知るある従業婦は次のように語っている。「吉原は意外なほどさびしいところで、遊びにくる客も少なく、まごまごしていたら食い込んで借金になる心配さえありました」（神崎、百十九）。昭和二五年当時、吉原に訪れるのは重役クラスの金持ちか、出張や観光で東京に訪れた人間がほとんどだった。当時の男たちが遊ぶところとしては新宿二丁目が抜群の人気で「吉原などと比べるとはるかに洒落ていた」（福富、一〇二）といわれる。すでに吉原は「不夜城」と呼ぶには少々寂しすぎる場所に変わっていたのである。

しかし『アサヒ芸能』が伝えるのは、あくまでも吉原という名前が喚起するイメージに相応しい吉原の姿である。売防法の登場によって激烈な衰退を経験する吉原は、このイメージと齟齬を起こすものでもなく、またその衰退は非常に衝撃的な話題として人々の関心を惹くことも可能になる。さらに吉原の衰退は、ただ吉原のみに限らず、隣接する盛り場浅草にまで打撃を与えるものでえあったと伝えられ、吉原という磁力の大きさ、売防法のもつ衝撃がリアルなものになるのである。

「吉原隆盛の当時は、泊り客が時間潰しに夜間割引を大いに利用、しばしば列をなしたといわれる（浅草日活能勢支配人談）この六区だが、現在なお夜間割引をしながら当時の面影はまったくみられない。日没ともなると客の足は減る一方で、夜間客のかなりの減少は多分に〈吉原の死〉によるところだ。」[3]

盛り場浅草の衰退の原因は、新宿、池袋といった新興の盛り場に若者が流れるようになったこと、浅草のバー、キャバレーは既に飽和状態にあったうえに上野・錦糸町といった盛り場が勢力を伸ばしてきたこと、そしてなによりも「進出を望む外部の勢力に対して閉鎖的」（福富、二一五）であった浅草の地域性によるところが大きい。しかし地元の人々の口から出てくるのは「吉原という一大不夜城が消えてしまったからだ」という理由である。吉原衰退の原因が売防法の施行にのみあるのではないのと同様に、浅草の衰退もまた吉原の消滅によってのみ引き起こされたのではない。しかし売防法による衰退という説明は吉原を、また浅草を身近に知らない人々にとっては説得力あるものになる。

だが同時に吉原衰退の話題だけでは決して読者の興味をかきたて続けることはできない。そこで売防法への抵抗と、復活の兆しとが吉原に見出されるようになる。

「午後十時、旅館の前には縁台をもちだした客引き（やり手婆さん？）の声がかしましい。『ちょっと、そこの兄さん、いらっしゃい。いい

ことがあるのよ。』慌て者には〈赤線が公然と復活〉と思われるような風景だ。（中略）『大きな声じゃいえないけど、熱海式アンマはどう、部屋代三百円でアンマ代が三百円。あとはおニイさんのもってゆきようでどうにもなるわ。（略）わずか六百円で若い女とスリルとセンスにとんだ遊びができるのよ』こうもちかけられては〈何かいいことないかな〉とぶらついている男はついふらふらになる。だがこの女アンマさんたち、なかなか客の意のままにならないのも確かだ。」[1]

「再転業への秘かな動き」と見出しの付けられたこの記事は、まず赤線廃業後の吉原に組合が設立されたことを伝える。組合設立の目的は「私たちが真面目に転業しても、とかく世間は疑義の目でみたがる。そういう傾向を一掃するのと、街を浄化する」[1]ためだとされているが、その直後にやり手婆さんのエピソードが添えられることで、吉原の人間が語る組合の本当の目的は「再軍備」への準備という文脈にすり替えられる。またこうした客引きの声は、長い歴史のなかで生き延びてきた吉原遊郭のしぶとさを彷彿とさせるものでもある。ある業者はこうも語っている。「心の底では皆が昔の吉原の復活を期待しているんですよ」[1]と。真意のほどは怪しいながらも、いかにも「吉原らしい」人間や出来事がちりばめられることで、『アサヒ芸能』の吉原復活の記事は「本当らしさ」を増していくのである。

だが『アサヒ芸能』はこのあと吉原からは撤退していく。今回調べた限りでは「吉原」という名前がつぎに登場するのは一九六八年である[注四]。こうした『アサヒ芸能』の撤退はどのように説明できるだろうか。ここでは山谷ドヤ街を例にその理由について考察してみよう。

山谷ドヤ街は吉原の北に位置する「暗黒の街」、周囲から隔離された「真空地帯」[5]としてイメージされる場所である。その山谷ドヤ街を『アサヒ芸能』はつぎのような記事で取り上げた。

「来年四月一日から、売春防止法の刑罰規定が実施されるのを前にして、現在売春婦の巣窟になっている東京都浅草山谷町の旅館街、通称〈山谷ドヤ街〉の旅館組合（組合長帰山仁之助氏）では、このほど結束して売春一掃運動をはじめた」[5]。

暗黒の街であるはずの山谷における「売春一掃運動」のきっかけは、この翌年四月に施行されることになった売春防止法にあった。その効果を狙っての一掃運動はＰＴＡや婦人会の強力な後押しもあって推進される。「学校近辺の公園で昼間から売春婦が下着一枚で遊んでいた」、小さな子どもたちの間で「売春ごっこが流行っている」[5]といったことがＰＴＡや婦人会から報告される。しかし一方でドヤ街にはニコヨン[注五]の夫の稼ぎだけでは食べていけないために「必要に応じて売春を働いている」売春婦も暮らしている。これら二つの売春婦の姿が交互に描き出され[注六]、それによって「ドヤ街」らしさが強調されていくのである。彼女たちはドヤのイメージをリアルに喚起させる存在であり、同時に読者の驚きと好奇心とを誘うものでもあった。だがそんな彼女たちの姿だけでは山谷は記事にはならなかっただろう。そこで売春婦一掃運動がおこったという意外性が

付与されてはじめてそれはニュースになり得る。ゆえにこの運動のその後の展開などは記事にはならない。つまり山谷での「売春婦一掃運動」が『アサヒ芸能』に取り上げられたのは、その事件のきっかけや展開そのものよりも、あの山谷でそれが起こったというところにニュースとしての価値があったからに他ならないのである[注七]。

『アサヒ芸能』は山谷というドヤ街が放つ強烈なイメージに依存して、読者を惹きつける「ドヤ街」の姿を描き出している。しかしそれは単に「ドヤ街」のイメージを伝えるだけのものではない。そこからの微妙なズレがあってはじめて記事になる。だがそのズレとは「売春婦一掃運動」に象徴されるような出来事、偶然性によって生じるものである。山谷がドヤ街というイメージ一色で強烈に塗りつぶされた街であるために、『アサヒ芸能』は容易にそこに新たな彩りを加えていくことができない。どのような彩りをほどこすのかは「山谷」という街、そこでの出来事に大きく規定されているのである。

ここでもう一度「吉原」の話題に戻ってみる。山谷がドヤ一色で塗りつぶされた街なら、吉原は「色」で塗りつぶされた街だといえる。『アサヒ芸能』はその「吉原らしさ」に依拠して記事を書いていた。だが「吉原らしさ」が強調されればされるほど、「なにかいいことないかなとぶらついている男」を『アサヒ芸能』に引き留めることは難しくなる。どんなに「色」の街吉原が伝えられても、結局読者がそこに見いだせるのは、吉原復活の兆しだけでしかない。しかし読者が吉原に期待しているのは復活の兆しなどではない。彼らが探し求めているのは赤線にかわるセックスであり、売防法をくぐり抜けるセックスなのである。売防法が禁じたセックスをウリにしていた吉原を刺激的に伝えるためには、そのイメージを越えるセックスを提示しなければならない。だが少なくとも売防法施行直後の吉原にそれを期待することはできなかった。『アサヒ芸能』に可能であったのは、あの「吉原」が消滅するという形での衝撃の提示であり、それ以上のものを吉原に求めることはできなかったのである。

赤線が消滅したあと、どこに行けば、どんなセックスが用意されているのかが、読者が『アサヒ芸能』に求めるもの、あるいは『アサヒ芸能』が読者に提示するものとして重要になってくるのである。

三　メディアのなかの街・千束

売防法の施行とその動揺を吉原とその周辺からみていったわけだが、もう一つこの周辺盛り場で『アサヒ芸能』に取り上げられる場所がある。それが千束町である。

「浅草六区から吉原方面へぬけるひさご通りに面して一丁目から三丁目まで二八八三世帯、一二二九六名（台東区役所しらべ）で構成されているこの一帯は、一見、なんの変哲もない下町の盛り場だ。しかし約二九〇〇の家数のうち、盛り場らしさを示す商店の数は二六〇件で一割に満たない。（浅草商連しらべ）ひさご通りのほんの上っ面だけが盛り場で大部分がしもたや、旅館、アパートなどの灰色の街だ。浅草と吉原をつなぐヒモのような盛り場である。」[6]

浅草、吉原、山谷に比べ、名の知られていない千束町。ところがそこが、赤線にかわり人々を刺激しなおかつ売防法にひっかからないセックスを探し求めている『アサヒ芸能』に注目される。そのときとりたてて特徴を持たなかった千束が、「ワイセツ地帯」として突然「異様な魅力」を放射し始める。たとえばその魅力は色で表現される。「どす黒い性の狂宴」「灰色のY地帯」など。どこかおどろおどろしい言葉が多用される。山谷ドヤ街の記事にも「暗黒の街」という表現が使われているが、それは「悪」のイメージと結びつくもので、「灰色」「どす黒い」といった表現の孕む曖昧さ、混濁したイメージは喚起しない。「一見、なんの変哲もない下町の盛り場」がこうした色で塗り込められていくとき、千束は我々の住む場所と見た目は何も変わりはしないのに、突然ぽっかりと異空間への口を開く怪しげな「異界」へと変質する。山谷ドヤ街という「異界」が暗黒街としてはっきりと他の生活空間から境界を引かれて存在しているのに比べ、千束の「灰色」はいつ迷い込んだかもわからない境界の不明確さを象徴する。そして読者はその妖しげな魅力にフラフラと誘い込まれていく。

「とあるしもたや、どこといって変りはないがカギが二カ所についている。『サツヨケのマジナイさ』という。現場へふみこまれる時間をながびかせる苦肉の策。玄関わきで年増の女が料金をとる。せまい階段を上がった四畳半が映画館だ。押入れのフスマをはずすと裏にスクリーンがはってある。映写機はフトンのあるべきところに安置されている。手慣れた設営だが、不安げにそわそわしている。カラーと白黒二本で上映時間は約二十分。ヒザもすれ合わんばかりにつまった八人の客は静まりかえっている。／一組のアベックは、スクリーンの痴態にあわせてお互の肉体をまさぐっていた。羞恥心の寸断された二十分。／『こんどは実演です』と映写技師が声をかける。映画とショーの二本立てとおいでなすったわけ。この拝見料二千円。／隣りの六畳に煎餅ブトンが一枚、役者（エロ実演者）をまっていた。／二十代の女が二人入ってくると、さっさと全裸になる。／映画であふられたひとりが『すげえな』と女の太モモにふれる。また一人が乳房に手を出す。女は『フフン』と鼻でわらう。客は酔余のいきおいとエロ・フィルムの魔力で、女は商売で羞恥心をわすれる。その時間が十五分あまり。／しめて四十分ほど、一人当たり六百円のコーフン劇だった。」[6]

ここに登場するのは「せまい階段」「四畳半」「押入のフスマ」「隣の六畳」「煎餅ブトン」など。どれもこれもが生活の匂いを漂わせ、それでいながらまるで見慣れぬモノであるかのように存在している。さらにサツヨケのマジナイのためにつけられた二つのカギ、何に怯えているのか「不安げにそわそわ」とした手つきが、ごくありふれた光景を危険な香りのする場所へと変身させていく。ある種の後ろ暗さがこれらの言葉に託されている。そして何よりもこの「ワイセツ」興業の魅力は「羞恥心」にある。見ず知らずの人間が四畳半という狭い部屋で顔を突き合わせてエロ映画をみる。客は互いに無関心でいられない距離にある奇妙な行きずりの共犯者に気まずさ、気恥ずかしさを覚えるが、そうした日常の感覚は酒の力と「エロ・フ

ィルムの魔力」によって忘れ去られ、女の太股や乳房に手を出す客たちは、羞恥心の寸断された時を過ごす。羞恥心がもっとも日常に根ざした感覚の一つだとするならば、その感覚に訴え、なおかつその感覚を寸断するとされる千束のワイセツ興業は、吉原の赤線とは異なった刺激を用意するものであるかのように見える。赤線に典型的にみられるのは、郭と呼ばれるような境界の存在である。郭の中には非日常とされる世界がつくりだされ、そこに訪れる者を日常の世界から引き離す。二つの世界は違う秩序で統制され、客は二つの秩序を使い分ける。ところが千束にはそうした境界が存在しない。「羞恥心」を一つの指標として、客は「我々の世界」にいながらにして秩序の転倒した世界に移動する。

だがこうした移動は、ワイセツ興業の営業場所であるシキに訪れる客のものだけではなくなっていく。

「さいきんでは、・・・〈敷さがし〉というメンバーが一つふえた。取締がきびしくなったので、今までのように定着したシキでは、安心して興業できない。荒稼ぎするワイセツ企業ほど、頻ぱんにシキを移転する。この敷営業が頭痛のタネ。千束町一帯の地理、人間関係に通じた土地っ子が、この大役をひきうけているらしい。」[6]

売春防止法の施行を受けて、ワイセツ興業はその営業形態を「定着した」シキから「移動する」シキへと変貌させた。もともと赤線の時代から「秘密興業」によって、ポン引きの誘導なしにはそれがどこにあるのかわからないつくりになっていたシキは、取締の目から逃れるべくさらにその匿名性を高めようとした。シキは「千束一帯の地理、人間関係に通じた土地っ子」の助けを借りて、新たなシキへと移転する。千束のどの場所でもが、いつでもシキになる。昨日までなんの変哲もなかった町が、シキの移転によって突然「ワイセツ地帯」として蠢動する。ところが町の住人は昨日と今日とを、同じ世界として生きている。彼らはそれと知らぬ間に「ワイセツ地帯」の住人へと変貌し、そして「シキ」が移転したときまた「ふつうの」世界の住人に戻るのである。場所の不特定性。これが吉原とは大きく異なる点であり、これもまた千束のワイセツを特徴づけるものである。

ではこの匿名性と場所の不特定性とを特徴とする千束の魅力にひかれて訪れる客とは一体どのような人々であったのだろうか。

「占領がおわって駐留軍がへったあとは、会社、商店関係の流れがグッとふえ、ついで、ほろ酔いサラリーマン、商店員、東京見物のお上りさんという順位に変わり、現在では『三十歳前後、二万円くらいの月給をとるサラリーマン風が多いです』（リンタク屋K氏）というところらしい」[6]

さんざん妖しげなイメージで粉飾された千束だが、そこに訪れる人々はある意味でまったく「ふつうのひと」だといえる。そしておそらくこれらの客層は『アサヒ芸能』の読者層とも重なる。また千束のワイセツ映画に訪れる者のなかには、これらの客層とは一風かわった「中年の同伴客」[7]なども登場する。前者の客層が千束のワイセツ映画を「ほろ酔いのイタズラ心」で訪れているのに対し、後者のそれはワイセツ映画を「興奮剤に利用」していたり、「ロマグレ

紳士が若い娘を伴って口説の効果をあげ」[6]るために使われていたりする。ここでは千束の利用方法が紹介されている。いずれの形にせよ『アサヒ芸能』の読者層が一度は行ってみようかと思えるくらいの身近さと魅力が千束には付与される。

本稿で取り上げた三つの盛り場と比較したとき、千束という盛り場がある独特のポジションにあることがわかる。吉原・浅草・山谷が広く名を知られた場所であるのに比べ、千束は圧倒的に知名度が低い。しかしだからこそ『アサヒ芸能』は千束をセンセーショナルに記事にすることができた。吉原や山谷のような強烈なイメージをもった街を取り上げるとき、『アサヒ芸能』はあくまでその個性に依拠し、それらを変形させることでしか記事をつくれない。吉原・山谷で起こる何かがニュースになる。だが千束はむしろその新奇さ（知られていないこと）が、読者を惹きつける魅力となる。『アサヒ芸能』は千束を自在に切り取り、『アサヒ芸能』独特の穿ったスタイルを発揮するなかで、「千束」を発見してくる。またニュースになるのは千束でどんなセックスが得られるのかであって千束はその舞台の一つにすぎない。これは吉原のセックスがどのようなものであったのかが問題にならないのとは対照的であり、またこれ以後期待される情報とは、千束のように「どんな興奮、どんな刺激が得られるか」を伝えるものになる。

吉原や山谷が『アサヒ芸能』に取り上げられなくても、その存在のリアリティーを持ち続けるのに対し、「千束」は『アサヒ芸能』の中だけでその「異様な魅力」[6]を放射することができ、『アサヒ芸能』が取り上げなければその存在のリアルさは失われてしまう。「千束」は地図には存在しない『アサヒ芸能』によってつくられた街である。場所でない「場所」。それが「千束」である。

四　性風俗とメディア

以上のような変化は、一九五八年に全面施行された売春防止法との関連で捉えるとき明瞭なものとなる。売防法が意図していたのは国家が売春を保護・管理しているという事実の消滅である。ある特定地域で売春、あるいは売春に準ずるような行為が公然と行われていることは、国家がそれを容認していることになる。よってそれは摘発の対象となる。とくに売防法施行直後はそうした傾向が顕著であった。セックスを売る側は特定の場所を定めなくなる。さらに売防法は金銭を介して性交することを禁じたわけだが、逆に言えばそれはそれ以外のセックスを許可したことを意味する。業者は売防法に引っかからない形の商品を生み出すことに躍起になる。サービスは多様化し、客をうまく刺激し、その好みを的確に掴んだものだけが生き残ることができる。『アサヒ芸能』が提示するセンセーショナルもこれとまた同様であった。

『アサヒ芸能』はその時代、その社会に共有されているある種の感覚に依拠しつつ、その感覚を揺さぶる可能性のある領域を見つけだしてピックアップし、それをセンセーショナルに読者に訴えていく。このときその都度その都度センセーショナルなものとして取り

あげられ、認識される性のあり方が「性風俗」であり、『アサヒ芸能』は生活の中のある諸相を性的に焦点化することで「性風俗」へと変質させる媒体なのである。さらにセンセーショナルであり続けるために『アサヒ芸能』は、常に立ち止まることなく新しく見えるセックスを探し続ける。そこに第二、第三の「千束」が『アサヒ芸能』の、あるいは売防法以後の世界を生きる我々の「性風俗」として登場する。その意味において千束は、これ以後の「性風俗」の出発点であったと位置づけられる[注八]。

そして『アサヒ芸能』の記事には、その時代時代の「性風俗」の断片、すなわち何がセンセーショナルな性として取りあげられ、何が取りあげられなくなったかという変化が克明に書き取られている。赤線の消滅に衝撃を覚えていた感覚は、次第に赤線の存在それ自体に衝撃を覚えるものにかわっていく。「吉原に女なしじゃ意味ねえぞ」の『アサヒ芸能』でさえ、売防法施行から一年たった頃には「封建的な後進国にみられるような強制的、または準強制的売春制度――すなわち日本の旧赤線地帯のようなもの」[8]と語るようになる[注九]。また当時台頭していた「トルコ風呂」などに代表される曖昧な性のあり方[注十]は、つねに好奇心をかきたてる、センセーショナルな性として『アサヒ芸能』をはじめとするメディアに発見され、「性風俗」へと変換されていく。

メディアを不可欠な要件として構成される「性風俗」。それはたしかに移ろいやすく表層的ではあるが、しかし同時にその魅力あるいはそれを求めてやまない方向性が、我々の社会には確として存在している。そこにおけるメディアの位置をどう捉えていくのか。そのとき次の言葉が我々にある示唆を与えてくれるだろう。「いまではそれが特徴とまでなっているある種の雑誌のなかで、ニュース記事ともフィクションともつかぬ分類のやっかいな領域が形づくられてきているが、この領域では現実のものと想像上のものとの間ではっきりした境界をひかれることはなく、相互に境界の侵犯が行われている。そして、マス・カルチュアが想像上のもの（フィクション）をあたかも現実的なものであるかのようにうまく感じさせ、また現実を想像的なもの（三面にのるようなニュース記事）であるかのように経験させるものとなったあとでは、それがマス・カルチュアの主要な機能のひとつとなったのである」（モラン、一九六九＝一九八〇、一五〇―一五一）。

本稿は戦後に生きる我々の性のあり方を問い直すために、「性風俗」という視点が有する可能性を検証していく試みの第一歩である。

【記事参照番号】

[1] 一九五八年八月二四日号「特集赤線再軍備」
[2] 一九五八年六月十八日号「性をもてあます夜―出張サラリーマンの冒険新地図―」
[3] 一九五八年十一月三〇日号「吉原と心中する？浅草」
[4] 一九五八年五月二五日号「元赤線楼主の発言」
[5] 一九五七年十一月十七日号「御同伴様は泊めません―ドヤ街の売春婦一掃運動」

［6］一九五八年二月二日号「セックス裏街道を行く①浅草千束町」
［七］一九五九年三月八日号「〈八ミリ御座敷映画〉製作本部・映倫無用の裏興行界と観客たち」
［八］一九五九年四月一二日号「やがて日本にも？売春王国ニューヨークの実態」

【引用文献】

朝日ジャーナル編『女の昭和史Ⅱ昭和三〇年代』朝日新聞社、一九八五年
藤目ゆき『性の歴史学』不二出版、一九九八年
福富太郎『わが青春の「盛り場」物語』河出書房新社、一九九五年
神崎清『決定版・神崎レポート売春』現代史研究会、一九七四年
小林大治朗・村瀬明『国家売春命令』自由国民社、一九七一年
小関三平「性の浸潤・拡散・蒸発―両性関係の現在―」、井上俊編『風俗の社会学』世界思想社、一九八七年
Morin, Edgar., *La Rumeur d'Orléans*, 1969, Éditions du Seuil, Paris.（杉山光信訳『オルレアンのうわさ・第二版―女性誘拐のうわさとその神話作用―』一九八〇年、みすず書房）
歴史評論編集部『近代日本女性史への証言』ドメス出版、一九七九年
徳間書店社史編纂委員会『徳間書店の三十年　一九五四―一九八三』徳間書店、一九八四年（非売品）

【脚注】

注一　分析にあたり、まず週刊誌『アサヒ芸能』の一九五七年から現在までの記事を二年間隔で概観した（創刊の年の五六年については資料が入手不可能であった）。さらに歴代編集者を調べ、記事レイアウトや記事見出しなどから『アサヒ芸能』の歴史を三期に分類した。第一期が草創期にあたる一九五六年から五九年である。この時期は『アサヒ芸能』という雑誌の性格だけでなく、弱小出版社として出発した東西芸能出版の経営が確立される時期でもある。第二期は五九年から七十年代前半に至るまでの時期である。第二期の開始は週刊誌ブームとその生き残りをかけた競争の始まり、『アサヒ芸能』の編集体制が変更されてからの時期にあたる。特集・連載の本数が増加し、目次のレイアウトも現在のそれに近いものになってくる。海外でのセックス取材が連載されはじめるのもこの頃である。第三期は七十年代前半から始まる。トルコ風呂の個室内での撮影や、性行為を細かく描写する記事が目に付くようになる。またこの時期から広告に「ポルノビデオ」という言葉が登場し、アダルトビデオが記事の中で大きなウエイトを占め始める。以上のような時期区分により『アサヒ芸能』の大まかな変遷を追っていったわけだが、『アサヒ芸能』という雑誌の性格はほぼ第一期に確立されたといえる。よって今回はおもに第一期の記事を中心に分析を行った。比較のため、記事の収集は七三年まで行っている。第一期の記事数は全部で百三十四本。そのうち売防法や売春、あるいはこれに関連した記事が八十六本（約六四％）であり、本稿での議論はこれらの記事に依拠している。ちなみに六〇年一月十七日号から七一年十二月十六日号までの記事三五四本のうち、連載以外の記事は二一〇本で、うち一三九本（約六三％）が売防法や風営法およびこれに関連するものを対象にした記事であった。もちろん売春はすでに非合法化されているので、記事は「赤線」の代わりとなった様々なセックス・サービス業（トルコ風呂やピンクサロンなど）について記述しているものが多い。またこうした記事は値段の明記やサービス内容、女性の特徴を克明に描写する、全国各地の盛り場を紹介するといったところに特徴がある。連載記事一三四本については注八を参照のこと。

注二　一九四六年十一月十日に芸能専門紙として創刊された。当時の発行元は竹井博友を社長とする「アサヒ芸能新聞社」であった。五三年に竹井氏は一般日刊紙「日東新聞」の発行へ踏み切り、これが失敗。借金返済のために『アサヒ芸能新聞』というタイトルを売却する気でいた。しかし『アサヒ芸能新聞』のタイトルに愛着をもっていた執行部メンバーたちが、当時副社長として労使交渉にあたっていた徳間氏に『アサヒ芸能新聞』の復刊を懇願。徳間氏がこれを承諾し、その継続に力を貸すことを決断した。他社に渡りかけていた『アサヒ芸能新聞』というタイトルを買い戻すと、五四年三月一九日、徳間氏を社長とした「株式会社東西芸能出版」が設立登記され、三月二九日、復刊第一号の『アサヒ芸能新聞』が発行された。このときの製本数が二万三六五〇部で、有代部数は一万九千弱。B5判の週刊誌スタイルにきりかえるまで、こうした二～三万部という発行部数が二年以上続いていた。以下、この節の『アサヒ芸能』に関する記述はとくに断りのない場合は、『徳間書店の三十年』徳間書店、一九八四（非売品）を参照。尚、引用文末尾左端の［　］内の数字は、本稿末掲載の記事参照番号を指示。

注三　市川忠吉氏は元全国性病予防自治会副会長であり、この自治会は全国の赤線業者が運動資金を持ち寄って結成されたものであり、理事長の鈴木明氏は売春防止法の法案つぶしのための議員への献金疑獄で逮捕されていた。

注四　二月十一日号「たくましく性に生きた日本の女たち②吉原の遊女たち」

注五　第二次世界大戦後、復員などによる過剰な労働力供給により就労が不安定で、低賃金の不熟練労働者が多数発生した。このような労働者層の緊急的な雇用対策として、昭和二四年緊急失業対策法が施行された。この緊急失業対策法は、国の補助によって地方公共団体の失業対策事業、あるいは公共事業にこれらの労働者層を就労させるべく、公共職業安定所に登録させた。この失業対策事業発足時の東京都の一日の賃金が二百四五円であったことから、登録日雇い労働者はニコヨンと呼ばれた。

注六　『アサヒ芸能』の記事にはこの山谷での記事に典型的にみられるような、二つの売春婦の姿が登場している。つまり「病根としての売春婦」と「社会的弱者としての売春婦」である。さらにこの二つの売春婦像は時系列的にみると前者の姿から後者の姿へと移行していく傾向にある。一九五七年から五八年にかけては客を脅し、性病をまき散らす「社会悪」として売春婦（とくに街娼）が描かれているのに対し、五九年以降からは生活苦や、業者ややくざに騙されたといった理由で売春を強制されることになった「不幸な境遇の女性」として描かれるようになる。また前者の売春婦が都会の盛り場に出没する「身近な」存在であるのに比べ、後者のそれは炭坑や沖縄などに代表される遠く隔たった地方において発見され、しかもやくざや悪徳業者といった「自分たち」では関知しえない世界での出来事として認知されるようになる。同情に値する売春婦の姿を「自分たち」とは違う世界において発見していくその視線は、場所を変え、国を変え、いま現在までも続いているのではないだろうか。

注七　山谷での売春婦一掃運動は売防法の施行を理由に推進されたが、売防法が意図していたのは国家が売春を保護・管理していることを意味する公娼制度の廃止であって売春の全面的禁止ではなかった。「売春防止法が出来ないと国際連合の総会が採択した人身売買及び他人の売春からの搾取の禁止に関する条約の批准ができない」（歴史評論編集部、一九七九年、九八頁）ために政府は売防法を可

決したのであり、その法律の主旨からは公衆の目にふれない形で行われる単純売春は処罰の対象とはならないことになる。そして山谷は少なくとも「公衆の目」にふれない「真空地帯」としてイメージされている。それは単にイメージだけの問題ではなく実際にそのように取り扱われもしているのである。売防法は政治や経済の表舞台である都市から性を取り除くことを目的とした。もっといえば首都東京から「吉原」を消滅させることを目的としていた。だが整備され、計画された都市はそれらが進めば進むほど処理しきれない混沌と猥雑を生み出す。都市はつねにその処理場を必要としているのである。吉原や山谷はまさにその処理場であった。しかし「吉原」という処理場は消滅した。山谷はこれ以後ますますその混沌を引き受けていかなければならない場所になる。都市に暮らす人間はそのことを知っているが、同時にそのことを知らない。山谷で売春婦一掃運動が起こったことに衝撃を覚えるのは、そのことを知っているのに知らないからだ。山谷は売春婦を一掃する場所ではない。それは彼女たちをはじめとする混沌を引き受ける場所なのだ。『アサヒ芸能』がその展開に興味を持たなかったことも結局それが『アサヒ芸能』の読者をはじめとする「われわれ」の社会とは関係がない出来事だったからではないだろうか。

注八　五九年以後の『アサヒ芸能』の記事の一つの特徴は、それまで東京あるいは大阪などの知名度の高い都市を取り上げていたのが、場所よりも何が行われているのかに重点をおいた記事（「サービスタッチはここまで・ピンクの湯気たてるトルコ風呂」六〇年五月一五日号など）にかわったことや、それほど知名度のない地方へ注目した記事（「日本の裏街道にあえぐ女たち―三千キロ踏破のルポが語るもの―」六一年十一月十二日号 など）が増えてくることにある（注一での第二期の記事についての議論も参照のこと）。とくに日本全国を舞台とした探訪記的なセックス連載記事が定着するのがこの時期であり、第二期の連載記事一三四本のうち四〇本（約三〇％）を占める。これらの記事は売防法に引っかからない形のセックスがどこに、どんな形であるのかに徹底的に焦点を合わせているものであり、「千束」での形式が定式化されたものとみることができる。

注九　「あれが赤線の灯だ―甲府レジャーママの内職売春」（一九六一年三月十二日号）、「教祖様はもと赤線業者」（一九六一年四月十六日号）などは赤線という言葉が衝撃的なものに変質していることを示すものである。

注十　五九年までに登場する「トルコ風呂」は多様である。家族用トルコや女性の本格的なマッサージのあるもの、ただのサウナ風呂であったり、女性のサービスが過剰なものなど。とくに「真面目なトルコ娘」と「マッサージも満足にできないトルコ嬢」が交互に登場し、ますますそのいかがわしさが強調されていった。

"Asahi Geinou" and the Constitution of Sei-Fuuzoku

Kayoko KAGEYAMA

The purpose of this paper is to examine the word of sei-fuuzoku and a potentiality of it.
In general, sei means "sex" or/and "sexuality", and fuuzoku almost signifies "manners" in English. And only few attempts have so far been made at sei-huuzoku, though not only sei-fuuzoku is a familiar word in Japan but also its importance has ever been poin-ted out.
How can we take up phenomena of Sei-fuzoku ? As one way this article use a Japanese weekly magazine, "Asahi Geinou". "Asahi Geinou" which supposes middle-aged men who are able to be thought as a core of Japanese Seifuzoku as reading public, was started in 1956. The editing policy, 'as a popular journalizm we will dig in central into life and manners ', was orientated under the effect of the Anti-Prostitution Law which was enacted in 1956. "Asahi Geinou" diged up and appealed widely to its reader varicolored events which were expected to be caused as a result of the Anti-Prostitoution Law,for example underground traffic in sex and consequential imbroglios. Furthermore "Asahi Geinou" were digging up new and aphrodisiac sex. Because reader desired informations ——how can we get sex? can we get what kind of sex? —— after Anti-Prostitution Law. Therefore we can find marked figures of sei-fuuzoku and its transition in "Asahi Geinou", and that "Asahi Geinou" is a medium which transforms a dimention of ordinary life to a sei-fuuzoku by focusing sexually on a side in our life.
A close look at these processes will reveal that media play an important part in the constitution of sei-fuuzoku after Anti-Prostitution Law.

Key words

•Asahi Geinou •Sei-Fuuzoku •Anti-Prostitution Law •Yoshiwara/Senzoku